

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXIV, 2020

国際仏教学大学院大学研究紀要
第24号（令和2年）

智顛撰 『維摩經文疏』 訳注（八）

藤
井
教
公

智顛撰『維摩經文疏』訳注（八）

藤井教公

はじめに

筆者は智顛撰『維摩經文疏』の訳注を、順次、本誌『国際仏教学大学院大学研究紀要』第十七号（平成二十五年三月刊）と第十八号（同二十六年三月刊）、第十九号（同二十七年三月刊）、第二十号（同二十八年三月刊）、第二十一号（同二十九年三月刊）、第二十二号（同三十年三月刊）、第二十三号（平成三十一年三月刊）に、それぞれ智顛撰『維摩經文疏』訳注（一）、同（二）、同（三）、同（四）、同（五）、同（六）、同（七）として発表した。

本稿は、先に刊行した訳注（一）から（七）に続くものである。体裁はこれまでの稿を踏襲して、『新纂大日本統藏經』第十八卷所収の『維摩經文疏』のテキスト原文を数行のまとまりごとに区切って示し、その部分の訓読を掲げ、次にその部分の訳注を付した。本稿は四八二頁中段一行目から四八五頁上段十三行目までを掲載する。この続きは順次発表していきたい。過誤の多いことを懼れるが、大方の批正を請う次第である。凡例は次の通りである。テキストの解題は智顛撰『維摩經文疏』訳注（一）を参照されたい。

凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏経』卷十八の頁と段を示した。
- 一、字体はテキスト部分とその引用、書き下し文、『大正藏経』所収の經典論書の引用部分などは、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩経』の经文部分である。
- 一、テキスト文中の（へ）内の部分は割り注部分を示す。
- 一、書き下し文中のヤマカッコは筆者による補いで、『略疏』との対照によるテキスト欄外注記に従って字を補ったものである。
- 一、守篤本純の『維摩詰経疏籤録』の場所の指示は、巻数と頁数を記し、頁数の次に表の場合は「オ」、裏の場合は「ウ」と記した。
- 一、註に記した典拠の引用文で、引用部分が判然としにくい場合には該当部分に傍線を付した。

本文

【テキスト】 482b1-c9

[482b] ⁽¹⁾ 降伏魔怨制諸外道

此卽傳釋紹隆三寶不斷之義。只由衆生內有愛結。外有鬼神六天魔王。內有諸見。外有十八種六師九十六種外道。所以能壞法城。使三寶斷絕。

今明。菩薩化衆生。內令禪定伏愛。外用神力降伏魔怨。內教智慧斷結。外爲說法制諸外道。內外魔怨既伏。內外道制。歸正理。則涅槃城存。三寶之種不絕。故得紹隆也。若約四教。破愛見天魔外道。則有兩種。界內愛見。用生滅無生滅二種道諦。禪定伏愛。智慧制見。若界外愛見天魔外道。則用無量無作二種道諦。定莊嚴伏愛。慧莊嚴制見。故此經云。天魔者樂生死。外道者樂諸見。菩薩於生死而不捨。於諸見而不動。是故天魔外道皆吾侍也。若降伏界內愛見天魔外道。卽是護於化城涅槃。

三藏通教所明二種三寶紹隆不絕也。若降伏界外愛見天魔外道。卽是護大涅槃城。使別圓兩教三寶紹隆不斷絕也。故知。此文竝是釋前化佗之義也。

問曰。界內可有天魔外道。界外何得有天魔外道。

答曰。大涅槃經說八魔。四是界內魔。四是界外魔也。華嚴經說十魔。此通界內外。分別可知。大涅槃迦葉菩薩自歎云。自之前皆名邪見人也。若內心成就界外愛見之法。則是三藏通教三乘聖人也。皆名界外天魔外道也。故此淨名大士呵須菩提云。入於諸見不到彼岸。同於煩惱離清淨法。[482]汝與天魔外道。一手作諸勞侶。此豈非界外天魔外道也。

問曰。聲聞可爾。菩薩云何。

答曰。華嚴經明菩提心魔三昧魔善知識魔。皆是菩薩魔也。央掘魔羅呵文殊云。外道亦修空。尼乾且默然。是界外外道也。若不爾者。八千菩薩何故被呵。不能加報也。

若約觀心。明三觀降伏天魔制諸外道者。假空空假觀成。降伏界內愛及天魔。制界內見及諸外道。假中中假觀成。卽降伏界外愛及天魔。制界外諸見及諸外道也。

（1） テキスト原文は「隆」に作る。『維摩經』 原文も「降伏魔怨制諸外道降伏」（『大正藏』 卷十四、575a12）とあり、今、改める。

（2） テキスト原文は「爲」に作る。『略疏』には「外用神力降伏魔怨」（『大正藏』 卷三十八、575b14）とあり、今、意味上からも「用」に改める。

（3） テキスト原文は「外」。『略疏』に「自此之前皆名邪見。則藏通三乘聖人」（『大正藏』 卷三十八、575c17-28）とある。今、意味上からも「則」に改める。

【書き下し】

魔怨を降伏し、諸の外道を制す。

此れ即ち三寶を紹隆し、斷ぜざるの義を傳釋す。只だ衆生の内に愛結有り、外に鬼神、六天の魔王有り、内に諸見有り、外に十八種、六師、九十六種外道有るに由りて、所以に能く法城を壞し、三寶をして斷絶せしむ。

今、明かさく。菩薩は衆生を化すに、内に禪定もて愛を伏さしめ、外に神力を用いて魔怨を降伏せしむ。内には智慧もて結を斷ぜしめ、外には爲に法を説いて、諸の外道を制す。内外の魔怨は既に伏し、内外の外道は制せられて正理に歸す。則ち涅槃の城は存し、三寶の種は絶えず。故に紹隆を得るなり。若し四教が、愛見、天魔外道を破すに約さば、則ち兩種有り。界内の愛見は、生滅・無生滅の二種の道諦を用い、禪定は愛を伏し、智慧は見を制す。若し界外の愛見、天魔外道ならば、則ち無量・無作の二種の道諦を用い、定の莊嚴は愛を伏し、慧の莊嚴は見を制す。故に此の經に云く、「天魔は生死を樂しむ、外道は諸見を樂しむ。菩薩は生死において捨てず、諸見において動かす。是の故に、天魔と外道は皆、吾が侍なり」と。

若し界内の愛見、天魔、外道を降伏せば、即ち是れ化城の涅槃を護り、三藏通教の明かす所の二種の三寶が紹隆し、絶えざるなり。若し界外の愛見、天魔外道を降伏せば、即ち是れ大涅槃の城を護り、別圓兩教の三寶をして紹隆せしめ、斷絶せざらしむるなり。故に此の文は、竝びに是れ前の化佗の義を釋すと知るなり。

問うて曰く、界内に天魔外道有るべし、界外に何ぞ天魔、外道有ることを得んや。

答えて曰く、『大涅槃經』に八魔を説く。四は是れ界内の魔、四は是れ界外の魔なり。『華嚴經』に十魔を説く。此れ界の内外に通ず。分別して知るべし。

『大涅槃』に迦葉菩薩、自ら歎じて云く、「此よりの前、皆な邪見人と名づくるなり。」と。若し内心に界外愛見の法を成就せば、則ち是れ、三藏、通教、三乘の聖人なり。皆な界外の天魔外道と名づくるなり。故に此の淨名大士は、須菩提を呵して云く、「諸見に入り彼岸に到らず、煩惱に同じて清淨の法を離るれば、汝、天魔、外道と一手に諸の勞侶を作す。」と。此れ豈に界外の天魔外道にあらざるや。

問うて曰く、聲聞は爾るべし。菩薩はいかん。

答えて曰く、『華嚴經』に菩提心魔、三昧魔、善知識魔を明かす。皆な是れ菩薩魔なり。

央掘摩羅、文殊を呵して云く、「外道も亦た空を修す。尼乾、且く默然たり」と。是れ界外の外道なり。若し爾らざるば、八千の菩薩、何故に呵を被り、報を加えること能わざるや。

若し觀心に約して三觀もて天魔を降伏し、諸の外道を制するを明かさば、假空・空假の觀成ずれば、界内の愛及び天魔を降伏し、界内の見、及び諸の外道を制す。假中・中假の觀成ずれば、即ち界外の愛、及び天魔を降伏し、界外の諸見、及び諸の外道を制するなり。

(1) 愛結 愛は渴愛、結は束縛のこと。すなわち煩惱の束縛の意。

- (2) 六天の魔王 欲界の第六天の魔王、波旬のこと。
- (3) 諸見 多くの見解。仏の如実知見以外はすべて誤りを含んでいるのでどれも邪見に類することになる。
- (4) 十八種、六師、九十六種外道 いずれも外道の種類を数えたもので、十八種は六師外道にそれぞれ三種あつたので、合計十八種という。『注維摩』卷三に「此六師盡起邪見。裸形苦行自稱一切智。大同而小異耳。凡有三種六師。合十八部。」(『大正藏』卷二十八、351a15-17)とある。

六師は釈尊の当時、様々な新思想家たちが輩出した中で、仏教以外の代表的な思想家たちをいう。この六師がそれぞれ十五種の教えを弟子たちに授けたので、九十種の教えとなり、それに師の六師を加えるので計九十六種となる。『薩婆多毘尼毘婆沙』卷五に「爾時^レ有^レ梵志。是外道六師門徒。六師者。一師十五種教。以授弟子。爲教各異。弟子受行各成異見。如是一師出十五種異見。師別有法。與弟子不同。師與弟子通爲十六種。如是六師有九十六。師所用法及其將終。必授一弟子。如是師師相傳。常有六師。」(『大正藏』卷二十二、536a22-27)とある。

- (5) 愛見 情動的煩惱と意識や概念に基づいた煩惱、この二種の煩惱のこと。
- (6) 生滅・無生滅の二種の道諦：…無量・無作の二種の道諦 『法華玄義』卷二に説かれる四種の四諦(生滅、無生滅、無量、無作)のうち生滅と無生滅の二種四諦、及び無量と無作の二種それぞれの四諦中の道諦を指す。前二種は界内に、後二種は界外に属する。

(7) 此の経に云く『維摩経』問疾品に、「又仁所問何無侍者。一切衆魔及諸外道皆吾侍也。所以者何。衆魔者樂生死。菩薩於生死而不捨。外道者樂諸見。菩薩於諸見而不動。」(『大正藏』卷十四、549a7-10)とある。

(8) 化城の涅槃 『法華経』化城喻品に説かれる、一時的な蘇息処として仏によって仮に設けられた幻の城。声聞縁覚の二乗の不完全な涅槃を喩える。『妙法華』化城喻品第七に「於險道中過三百由旬。化作一城。告衆人言。汝等勿怖莫得退還。今此大城。可於中止隨意所作。若入是城快得安隱。若能前至寶所亦可得去。是時疲極之衆。大歡喜歎未曾有。我

等今者免斯惡道。快得安隱。於是衆人。前入化城。生已度想生安隱想。爾時導師。知此人衆既得止息。無復疲倦。卽滅化城。語衆人言。汝等去來寶處在近。向者大城我所化作爲止息耳。」(『大正藏』卷九、264-13)とある。

(9) 『大涅槃經』に八魔を説く。南本『大般涅槃經』卷二十に「欲破八魔。八魔者。所謂四魔無常無樂無我無淨。」(『大正藏』卷十一、74028-29)とある。

(10) 『華嚴經』に十魔を説く。佛駄跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』(六十華嚴)卷四十二に、「佛子。菩薩摩訶薩。有十種魔。何等爲十。所謂五陰魔。貪著五陰故。煩惱魔。煩惱染故。業魔。能障礙故。心魔。自憍慢故。死魔。離受生故。天魔。起憍慢放逸故。失善根魔。心不悔故。三昧魔。味著故。善知識魔。於彼生著心故。不知菩提正法魔。不能出生諸大願故。佛子。是爲菩薩摩訶薩十種魔。」(『大正藏』卷九、6636-12)とある。

(11) 『大涅槃』に「自ら歎じて云わく『大般涅槃經』卷七、四倒品に「世尊。我等悉名邪見之人。」(『大正藏』卷十二、64828)とある。

(12) 須菩提を呵して云く『維摩經』弟子品に「若須菩提。入諸邪見不到彼岸。住於八難不得無難。同於煩惱離清淨法。汝得無諍三昧。一切衆生亦得是定。其施汝者不名福田。供養汝者墮三惡道。爲與衆魔共一手作諸勞侶。汝與衆魔及諸塵勞等無有異。」(『大正藏』卷十四、5404-10)とある。

(13) 『華嚴經』に菩提心魔…を明かす。前注(10)の引用文中で十魔を説く中に、三昧魔、善知識魔が出る。菩提心魔は不知菩提正法魔に相当するか。

(14) 央掘摩羅、文殊を呵して云く『央掘摩羅經』卷二に「外道亦修空。尼乾宜默然」(『大正藏』卷一、52715)とある。

(15) 假空・空假の觀成すれば。天台の觀法で、從仮入空觀、從空入仮觀、中道第一義觀を三觀というが、虚妄の仮より空に入り(從仮入空觀)、その空に沈滞せず、仮の存在に一定程度の意義を認めて諸法の差別の理を体得する(從空入仮觀)。この段階に達すれば、界内の愛見、天魔、外道を制することができるという。

(16) 假中・中假の觀成ずれば 從空入假觀によって施設された仮の諸法の理を体得し、次にそこから中道の理に達する(中道第一義觀)。ただし、仮と中道は隔絶した存在ではなく、仮と中道とは相即したものであると達する。この段階に至れば、界外の愛見、天魔、外道を制することができるという。別教では三觀は次第の三觀であるが、円教においては次第の三觀で、しかも一心において三觀が同時に修せられるとする。なお、前項の假空・空假の觀、及び假中・中假の觀は、次段以降にも同じ表現が見られる。

【テキスト】 482c10-483a5

悉已清淨

此下二廣歎自行化佗。即爲二。一從悉已清淨訖不起法忍。是廣歎自行。二從已能隨順。訖心所行。是廣歎化佗。一廣歎自行。復爲二。一歎斷德。二歎智德。一歎斷德文有三別。一總歎。二別歎。三釋歎。一總歎斷德者。明此諸菩薩結惑生死皆斷。故言悉已清淨。結惑生死有二種。一界内。二界外。若三藏教補處。止伏界内見思。修諸功德名爲清淨。既未斷結非悉已清淨也。通教補處雖斷界内見思。侵除習氣。名爲清淨。界外見思未斷。非悉已清淨也。別教補處雖斷界外十一品無明。盡名爲清淨。三十一品無明尚在。非悉已清淨也。圓教補處非但界内惑盡。界外四十一品無明亦盡。雖餘一品。有若微烟。乃可得名悉已清淨也。如地持論明。第九清淨禪。至離一切見清淨禪煩惱智障斷清 [483a] 淨淨禪。菩薩依是禪故得大菩提果。故約圓教補處。說悉已清淨也。若約三觀明悉已清淨者。假空空假觀成。但離界内煩惱障。名爲清淨。界外二障未盡。不名悉已清淨也。假中中假觀成。界外煩惱障盡。名悉已清淨也。

(1) 原テキストは「名」に作るが、欄外注記に「名疑誤當作明」とあり、また意味上からも、今、「明」に改める。

【書き下し】

悉く已に清淨にして

此の下、二に廣く自行化佗を歎ず^①。即ち二と爲す。一には「悉已清淨」より「法忍を起こさず」に訖るまで、是れ廣く自行を歎ず。二には「已に能く隨順す」より「心所行」に訖るまで、是れ廣く化佗を歎ず。

一に廣く自行を歎ずるを復た二と爲す。一には斷徳を歎じ、二には智徳を歎ず。一の斷徳を歎ずるの文に三の別あり。一に總じて歎ず。二に別して歎ず。三に歎を釋す。一に總じて斷徳を歎ずとは、此の諸の菩薩の結惑生死、皆な斷ずるを明かす。故に「悉已清淨」と言う。結惑生死に二種有り。一には界内、二には界外なり。若し三藏教の補處ならば止もて界内の見思を伏し、諸の功徳を修するを名づけて清淨と爲す。既に未だ結を斷ぜず、「悉已清淨」に非ざるなり。通教の補處は界内の見思を斷じ、習氣を侵除するを名づけて清淨と爲すと雖も、界外の見思は未だ斷ぜず。「悉已清淨」に非ざるなり。別教の補處は界外の十一品の無明盡く斷ずるを名づけて清淨と爲すと雖も、三十一品の無明尚お在り。「悉已清淨」に非ざるなり。圓教の補處は但だ界内の惑盡くるのみならず、界外の四十一品の無明亦た盡き、一品を餘し、微烟の若き有りと雖も、乃ち「悉已清淨」と名づくるを得べきなり。『地持論』の明かすが如く、「第九清淨禪は離一切見・清淨淨禪にして、煩惱智障斷清淨淨禪に至る。菩薩は是の禪に依るが故に大菩提の果を得。」と。故に圓教の補處に約さば「悉已清淨」と説くなり。

若し三觀に約して、「悉已清淨」を明かさば、假空・空假の觀成じて但だ界内の煩惱障を離るるを名づけて清淨と爲す。界外の二障未だ盡きざるを「悉已清淨」とは名づけざるなり。假中・中假の觀成じて、^⑧界外の煩惱障盡くるを「悉已清淨」と名づくるなり。

- (1) 二に廣く自行化佗を歎ず 嘆徳を総嘆と別嘆とに分かつ中、別嘆をさらに略嘆、広嘆、隣果して嘆するの三種に分けて解釈する中の第二。テキストに「二別歎徳。此下即有三別。一略歎自行化他徳。二廣歎自行化他徳。三隣果歎徳。」(p. 479b18-19) とあるのを参照。
- (2) 斷徳 煩惱を断尽する徳のこと。
- (3) 智徳 智慧の徳。
- (4) 結惑生死 煩惱と、それによつてもたらされる生死輪廻のこと。
- (5) 十一品の無明 天台の断惑論では、無明の品数について、別教においては元品の無明を含めて十二品の無明を数え、円教では四十二品を数える。別教の補處では仏果の直前であるから、十一品の無明を断尽して元品の無明の一品を残すのみであるが、円教では四十二品とするので、別教の補處で十一品を滅し終つたとしても、円教の立場からすれば三十一品の無明が残つてことになる。円教の補處であれば、四十一品の無明を滅し、元品の無明の一品を残すのみとなる。
- (6) 『地持論』の明かすが如く『菩薩地持經』に「云何菩薩清淨禪。略説十種。一者世間清淨淨。不味不染汚禪。二者出世間清淨淨禪。三者方便清淨淨禪。四者得根本清淨淨禪五者根本上勝進清淨淨禪。六者入住起力清淨淨禪。七者捨復入力清淨淨禪。八者神通所作力清淨淨禪。九者離一切見清淨淨禪。十者煩惱障智障斷清淨淨禪。如是菩薩無量禪得大菩提果。菩薩依是得阿耨多羅三藐三菩提已得當得」(『大正藏』卷三十、922b4-12) とある。
- (7) 假空・空假觀成じて 前段の注(15)を参照。
- (8) 假中・中假の觀成じて 前段の注(16)を参照。

永離蓋纏。

二別歎斷德也。蓋卽五蓋。纏卽十纏。有師言。五蓋但障初禪。十纏所障既近。豈足以歎大菩薩德。但一切界內外煩惱。悉能覆蓋於心。通名爲蓋。纏繞於心。通名爲纏。非五蓋十纏也。今只約五蓋十纏。離出一切界內外煩惱。離此更無別惑。界內一切煩惱。卽是枝葉蓋纏。界外一切煩惱卽是根。卽是本蓋纏也。若離界內五蓋。具出八萬四千塵勞煩惱。所以者何。貪欲蓋出二萬一千。恚蓋出二萬一千。睡眠二蓋合屬愚癡。出二萬一千。掉散是戒取等分出二萬一千。合八萬四千諸煩惱也。界外根本五蓋。出八萬四千。類作宛然。

問曰。界外何得有五蓋。別分對八萬四千煩惱也。

答曰。界外既有三毒。何得無五蓋也。若取涅槃卽是貪。若捨生死卽是恚。迷一實諦無作四實之理。卽是癡。有根本三毒。故有根本五蓋。卽得具八萬四千煩惱也。

今約教明離五蓋不同。數人明五蓋障於初禪。事障未來。性障根本。若斷性障。卽得初禪。上界無五蓋也。若成論明貪瞋通上界。二論雖通是三藏教門。而明蓋「[333]」義。以自不同。若二藏菩薩。離五蓋發世間禪定。此與凡同。未足歎補處之德也。若通別圓三教。離五蓋類悉已清淨。分別可知。十纏開五百纏。分別永離之義。類五蓋可知。

若約觀心明三觀永離蓋纏者。假空空假觀成。則永離界內蓋纏。假中中假觀成。則永離界外蓋纏也。

(1) テキストは「根卽是」に作るが、意味上から「卽是根」に改めた。テキスト欄外注記に「根卽是疑當作卽是根」とある。

【書さ下し】

永く蓋纏を離る。

二に別して斷徳を歎ずるなり。蓋は即ち五蓋^①、纏は即ち十纏^②なり。有る師の言く、「五蓋は但だ初禪のみを障す。十纏の障する所は既に近し。」と。豈に以て大菩薩の徳を歎ずるに足らんや。但だ一切の界内外の煩惱、悉く能く心を覆蓋するを通じて名づけて蓋と爲すのみ。心を繞纏するを通じて名づけて纏と爲す。五蓋十纏に非ざるなり。今はただ五蓋十纏に約して一切界内外の煩惱を離出す。此れを離れて更に別惑無し。界内の一切の煩惱は即ち是れ枝葉の蓋纏にして、界外の一切の煩惱は即ち是れ根なり。即ち是れ本の蓋纏なり。若し界内の五蓋を離るれば、具さに八萬四千の塵勞煩惱を出ず。所以は何ん。貪欲の蓋は二萬一千を出し、恚の蓋は二萬一千を出し、睡と疑の二蓋は合して愚癡に屬し、二萬一千を出す。掉・散は是れ戒取^④にして等分に二萬一千を出す。合して八萬四千の諸の煩惱なり。界外の根本の五蓋は八萬四千を出し、類して作すこと宛然たり。

問うて曰く、界外に何ぞ五蓋有りて別して分けて八萬四千の煩惱に對することを得んや。

答えて曰く、界外に既に三毒有り。何ぞ五蓋無きことを得んや。若し涅槃を取れば即ち是れ貪なり。若し生死を捨つれば即ち是れ恚なり。一實諦、無作の四實の理^⑤に迷わば、即ち是れ癡なり。根本の三毒有るが故に根本の五蓋有り。即ち八萬四千の煩惱を具することを得るなり。

今、教に約して五蓋を離れること同じからざるを明かさば、數人の明かす五蓋は初禪を障す。事障は未來、性障は根本なり。若し性の障を斷ずれば、即ち初禪を得。上界には五蓋無きなり。『成論』に貪瞋は上界に通ずるを明かすが若きは、^⑦二論は通じて是れ三藏の教門なりと云えども、而も蓋の義を明かすに以て自から同ぜず。

若し三藏の菩薩、五蓋を離れ、世間の禪定を發すれば、此れ凡と同じ。未だ補處の徳を歎ずるに足らざるなり。若し通・別・圓の三教が五蓋を離るれば、「悉已清淨」に類す。分別して知るべし。十纏は五百纏に開き、永離

の義を分別す。五蓋に類して知るべし。若し觀心に約して三觀は永く蓋纏を離るるを明かさば、假空・空假の觀成ずれば⁸⁾、則ち永く界内の蓋纏を離れ、假中・中假の觀成ずれば⁹⁾、則ち永く界外の蓋纏を離るるなり。

(1) 五蓋 「蓋」は煩惱のこと。『長阿含經』卷八に「復有五法。謂五蓋。貪欲蓋瞋恚蓋睡眠蓋掉戲蓋疑蓋。」(『大正藏』卷二、519-10)とある。

(2) 十纏 「纏」は煩惱のこと。『大智度論』に「纏者十纏。瞋纏・覆罪纏・睡纏・眠纏・戲纏・掉纏・無慚纏・無愧纏・慳纏・嫉纏。復次一切煩惱結繞心故。盡名爲纏。」(『大正藏』卷二十五、110a216-28)とある。

(3) 有る師の言く 未詳。守篤本純の『籤録』では、「此亦出此經疏家所說也」といい、特定していない(卷一、三十四才)。

(4) 戒取 戒禁取のこと。誤った戒律や禁制に執着したり、それに準ずること。守篤は「三業掉拳無益行修。義同非戒之戒。故云掉是戒取」と解釈する(卷一、三十四才)。

(5) 無作の四實の理 円教における無作の四諦の真理のこと。

(6) 數人 説一切有部のこと。『大毘婆沙論』卷三に世第一法を論じて、色界における斷蓋を論じている。同論卷三に「欲界無下可厭斷故。無有能畢竟斷制不起道。色界有下可厭斷故。得有能畢竟斷制不起道。有餘師説。此中斷制不起言。顯示暫時斷制不起義。以欲界道尚不能暫時斷蓋制纏令不復起。況能畢竟。是故無有世第一法。色界不然。故於彼有如暫時斷制不起。畢竟斷制不起。」(『大正藏』卷二十七、1429c6)とある。また、『摩訶止觀』卷七には事障と性障について以下の記述がある。「今且依世智約得禪者爲便。若初習禪破於事障。發欲界定。破於性障即發色定。故云事障未來性障根本。性障若除初禪法起。八觸觸身五支功德生。是初禪相。」(『大正藏』卷四十六、70c12-16)

(7) 成論に：明かすが若きは 『成実論』卷十一には「問曰。欲界中具十煩惱。色無色界除瞋。餘殘一切。是事云何。答

曰。彼中亦有嫉妬等。』(『大正藏』卷三十一、32a23-25)

(8) 假空・空假觀成ずれば 前々段の注(15)を参照。

(9) 假中・中假の觀成ずれば 前々段の注(16)を参照。

【テキスト】 483b7-24

心常安住無礙解脫。

此三釋歎斷德。無礙解脫卽是不思議解脫之異名也。故大智度論云。於諸解脫中。無礙解脫最大。

若三藏通教。皆云無礙斷解脫證。有師言。無礙伏解脫斷。此但明界内思議無礙解脫也。若別教明十地。亦言無礙道斷解脫道證。雖離界外見思。猶約定斷明離。非不思議無累解脫也。圓教明義。惑不障解。解不礙惑。是則智不斷惑。而蕭然永離界内外二種蓋纏。故名無礙解脫也。是以此經云。不斷癡愛。起諸明脫。而言心常安住者。若思議照寂解脫。觀熟照境無出入相。名心常安住。此非究竟安住也。若不思議寂照解脫法身體顯。寂而常照。卽是究竟心常安住也。此諸菩薩。皆得不思議寂照究竟安住。故言心常安住無礙解脫。

次約觀心。三觀分別。若別相三觀。皆是無礙道斷解脫道證。非究竟安住。一心三觀成卽是心常安住無礙解脫。

維摩羅詰經文疏卷第三

【書き下し】

心は常に無礙解脫に安住し、

此れ三に斷德を歎ずるを釋す。^① 無礙解脫は卽ち是れ不思議解脫の異名なり。故に『大智度論』に云く、^②「諸の

解脱中に於いて無礙解脱最大なり」と。三藏通教の若き、皆な、無礙斷、解脱の證を云う。有る師の言く、「無礙の伏、解脱の斷、此れ但だ界内の思議の無礙解脱を明かすのみなり」と。

別教の若きは、十地を明かし、亦た無礙道の斷、解脱道の證を言う。界外の見思を離ると雖も、猶お定の斷に約して離を明かすも不思議無累解脱に非ざるなり。

圓教の義を明かすに、惑は解を障せず。解は惑を礙げず。是れ則ち智は惑を斷せずして、蕭然として界内外の二種の蓋纏を永く離る。故に無礙解脱と名づくるなり。是こを以て此の經に云く、「癡愛を斷せずして諸の明脱を起こす」と。而して「心は常に無礙解脱に安住し」と言はば、若し思議の照寂解脱ならば、觀熟して境を照して出入の相無きを「心常安住」と名づく。此れ究竟の安住に非ざるなり。若し不思議の寂照解脱ならば、法身の體顯われ、寂にして常に照らす。即ち是れ究竟の「心常安住」なり。此の諸の菩薩、皆な不思議の寂照を得て、究竟して安住す。故に「心常安住無礙解脱」と言う。

次に觀心に約して三觀もて分別す。若し別相三觀ならば、皆な是れ無礙道の斷、解脱道の證なり。究竟の安住に非ず。一心三觀成ずれば即ち是れ「心常安住無礙解脱」なり。

維摩羅詰經文疏卷第三

- (1) 此れ三に…を釋す。「一に廣く自行を歎ずるを復た二と爲す。一には斷德を歎じ、二には智德を歎ず。一の斷德を歎ずるに文に三の別あり。一に總じて歎ず。二に別して歎ず。三に歎を釋す。」(p. 479b18-19)とある中の、三別の第三に相當する。

- (2) 『大智度論』に云く 同論卷五に「無礙陀羅尼最大故。如一切三昧中三昧王三昧最大。如人中之王。如諸解脱中無礙

解脱。大。丹注云得佛得道時所得也」(『大正藏』卷二十五、97c7-9)とある。

(3) 有る師の言く 未詳。

(4) 定の斷 禪定に拠る煩惱の断尽のこと。別教の場合、無礙道による断と解脱道による証によつて、界外の見思を離れども、禪定に拠る煩惱の断尽という点からすれば、出離については不思議無累解脱とは言えない、という。

(5) 此の經に云く『維摩經』弟子品に、「不滅癡愛起於明脱。」(『大正藏』卷十四、540b24-25)とある。

(6) 別相三觀 三觀に三種ある内の第一の觀をいう。第二は通相三觀、第三には一心三觀をいう。別相三觀は、別教の範疇に属し、空假中の三諦を隔別に觀する觀法。本書卷二十一では「今但約別教圓教二種。以簡別三觀之相不同。則有三種。一者別相三觀。二者通相三觀。三者一心三觀。一別相三觀者。歷別觀三諦。若從假入空。但得觀真。尚不得觀俗。豈得觀中道也。若從空入假。但得觀俗。亦未得觀中道。」(p. 627a24-b5)とある。なお、第二の通相三觀、第三の一心三觀の觀法は円教に属するが、第二の通相三觀は本書『維摩經文疏』のみに説かれ、その特徴と、一心三觀との相違などについて近年、研究成果が挙げられるようになった。一例を挙げれば、宮部亮侑「通相三觀の一考察」(『印度学仏教学研究』vol. 55-2、3/2007)など。

【テキスト】 483c4-484a5

[483c] 維摩羅詰經文疏卷第四 從念定訖三萬二千人俱

念定總持辯才不斷。

二歎智德文。有三別。一總歎智德。二別歎智德。三歎位釋成。一明總歎智德者。卽是念定總持也。若類餘經悉歎三昧陀羅尼德。今歎念定總持。卽是歎三昧陀羅尼之德。以此雙標歎章也。念卽是念佛三昧等諸三昧。菩薩得此

念佛三昧。十方諸佛常現在前。亦名王三昧。入此三昧。一切三昧悉入其中。所以者何。若根本禪。背捨勝處。九次第定。師子奮迅超越等。竝俗諦三昧。觀四諦十二因緣空無相無作。竝是真諦三昧。自性等九種大禪。及般舟一行首楞嚴等百八三昧。皆是中道第一義諦三昧。仁王經云。若得三諦三昧。卽入王三昧。菩薩入是三昧。一切三昧皆入其中。十方諸佛悉現在前。故知。歎念定是歎諸三昧德也。約四教分別。若析俗入真。卽是三藏教。明二諦三昧。但約二諦名王三昧。若體俗入真。卽是通教二諦三昧。但約二諦名王三昧。若從根本俗諦入中道。卽是別教三諦三昧。約三諦名王三昧。若一心圓入三諦。卽圓教三諦三昧。明王三昧也。大智論出異家解三昧。〔ハツ〕王三昧不同。意在此也。若約觀心。卽是三觀觀三諦。修三諦三昧。成王三昧。任運可知。總持者卽是歎陀羅尼德。此言能持能遮。持諸善法。不令漏失。遮諸惡法。不令得起。故名遮持。亦言總持。持一切善法不漏失也。

(1) テキスト欄外注記に「上疑脫持字」とあり、意味上から「持」の一字を加える。

【書き下し】

維摩羅詰經文疏卷第四 念定より三萬二千人俱に訖る

念・定・總持・辯才、不斷なり。

二に智徳を歎ずる文に三の別有り。一に總じて智徳を歎ず。二に別して智徳を歎ず。三に位を歎じて釋成す。一に總じて智徳を歎ずるを明かさば、卽ち是れ念・定・總持なり。若し餘經に悉く三昧陀羅尼の徳を歎ずるに類せば、今は念・定・總持を歎ず。卽ち是れ三昧陀羅尼の徳を歎じ、此れを以て雙じて歎ずる章を標するなり。念は卽ち是れ念佛三昧等の諸の三昧なり。菩薩は此の念佛三昧を得て、十方の諸佛、常に現在前するを亦た王三昧

と名づく。此の三昧に入らば、一切の三昧悉く其の中に入る。所以は何ん。根本禪・背捨^①・勝處^②・九次第定・師子奮迅・超越等^③の若きは竝びに俗諦の三昧なり。四諦・十二因縁・空・無相・無作を觀ずるは、竝びに是れ真諦の三昧なり。自性等の九種の大禪^④、及び般舟・一行・首楞嚴等の百八三昧は皆な是れ中道第一義諦の三昧なり。

『仁王經』に云く、^⑤「若し三諦の三昧を得ば、即ち王三昧に入る」と。菩薩、是の三昧に入らば、一切の三昧、皆な其の中に入る。十方の諸佛、悉く現在前す。故に知んぬ。念・定を歎ずるは是れ諸の三昧の徳を歎ずるなり。四教に約して分別せば、若し俗を析して眞に入るは即ち是れ三藏教なり。二諦の三昧を明かすは、但だ二諦に約して王三昧と名づく。若し俗を體して眞に入るは即ち是れ通教の二諦の三昧なり。但だ二諦に約して王三昧と名づく。若し根本の俗諦より中道に入らば、即ち是れ別教の三諦の三昧なり。三諦に約して王三昧と名づく。若し一心に圓かに三諦に入るは即ち圓教の三諦の三昧、王三昧を明かすなり。『大智論』^⑥は異家に三昧王三昧を解すに不同なるを出すは、意此こに在るなり。

若し觀心に約さば、即ち是れ三觀にて三諦を觀じ三諦三昧を修し、王三昧を成ず。任運に知るべし。總持とは、即ち是れ陀羅尼の徳を歎ず。此れ能持・能遮を言う。諸の善法を持して漏失せしめず、諸の惡法を遮して起ることを得せしめず。故に遮持と名づけ、亦た總持と言う。一切の善法を持して漏失せざるなり。

- (1) 背捨 八背捨のこと。減尽定に至るまでの八種の内觀。
- (2) 勝處 八勝處のこと。八背捨を修した後に至る、勝見を得るための八種の依りどころ。
- (3) 超越 超越三昧のこと。通常の次第を経ずに、散心からいきなり減尽定へ超入したり、減尽上から散心へ超出したりする仏や高位の菩薩の三昧をいう。

(4) 九種の大禪 自性禪・一切禪・難禪・一切門禪・善人禪・一切行禪・除惱禪・此世他世樂禪・清淨淨禪の九種の禪の

らる。

(5) 『仁王經』に云く『仏説仁王般若波羅蜜經』に「世諦三昧。眞諦三昧。第一義諦三昧。此三諦三昧。是一切三昧王三昧。亦得無量三昧」(『大正藏』卷八、83307-9)とある。

(6) 『大智論』は……を出す 同論卷七に、三昧と三昧王三昧について、その相違などを論じている。三昧王三昧については「若し心馳散攝之令還。欲入三昧故。種種馳念皆亦攝之。如此繫念入三昧王三昧。云何名三昧王三昧。是三昧於諸三昧中最第一自在能緣無量諸法。如諸人中王第一。王中轉輪聖王第一。一切天上天下佛第一。此三昧亦如是。於諸三昧中最第一。問曰。若以佛力故。一切三昧皆應第一。何以故獨稱三昧王爲第一。答曰。雖應以佛神力故佛所行諸三昧皆第一。然諸法中應有差降。如轉輪聖王衆寶。雖勝一切諸王寶。然此珍寶中自有差別貴賤懸殊。(後略)」(『大正藏』卷二十五、111b27-c8)云々。

【テキスト】 484a5-b18

法華經明三陀羅尼。一者旋陀羅尼。二者百千萬億旋陀羅尼。三者法音方便陀羅尼。旋陀羅尼者旋轉義也。從假入空觀能旋轉。觀假入空。即轉破界內外諸見愛。得入空眞諦。若但破界內。即是通教陀羅尼。一心圓破界內外。故即是圓教陀羅尼。百千萬億旋陀羅尼者。即是從空入假。旋轉。分別入界內世諦界外世諦。旋轉破塵沙界內外無知。顯恒沙佛法。若別破界外無知。則別教陀羅尼也。今一心圓破界內外無知。即是圓教陀羅尼也。

法音方便陀羅尼者。即是二觀爲方便道。得入中道第一義諦。若斷無明次第入中道。猶是別教陀羅尼。不斷無明。一心圓入中道。即圓教陀羅尼也。所言法音方便陀羅尼者。得此陀羅尼。解一切言音也。亦能一音說法。令衆生隨類得解。菩薩得此三陀羅尼。即入無礙陀羅尼。具足一切陀羅尼也。

問。此經歎補處陀羅尼。何得約初心釋。

答。發心畢竟二不別也。而後心入三諦。無礙橫廣。細極豎深。窮源。即是補處無礙陀羅尼也。

問。三藏菩薩有陀羅尼不。

答。如尸毗王。得歸命救護陀羅尼。當知亦有諸小陀羅尼也。輪王亦得。況菩薩也。

問。聲聞得小陀羅尼不。

答。二乘入涅槃。不須陀羅尼也。

約觀心修陀羅尼。三觀類作易見。不煩分別。辯才者。卽四辯也。小品經明七辯。大集經明二十辯。華嚴經明四十辯也。此歎三昧陀羅尼力用。

須約四教明辯義。初約三藏。若分別生滅四諦名字之法。無滯卽是法無礙辯。若分別生滅四諦義。無滯卽義無礙辯也。若通達六道言辭不同。亦能同其語。爲說生滅四諦。言辭無滯卽辭無礙辯。若稱根緣。於生生不可說。用四悉檀赴機而說。說無窮盡。卽樂說無礙辯。辯是辯了。才是才能。以蜜助藥。服之者易。才助文言。化道行也。通教約無生。別教約無量。圓教約無作。類解可見。而言不斷者。不盡也。法辯義辯。緣苦集知病不盡也。法辯義辯。緣道滅識藥無盡也。辭辯樂說辯。隨病授藥無盡。無盡卽不滅義也。復次從生滅辯。起無生辯。從無生辯。出無量辯。從無量辯。出無作辯。無作辯者。如風於空中。說法無障礙。故言不斷也。三觀約心修四辯。類解可知。

(1) テキスト原文は「小得」に作るが、本テキストの後の文中に「小陀羅尼」の語がある。また、『略疏』には該当部分
は存在しないものの、「問三藏菩薩有陀羅尼不。答如尸毗王。得歸命救護陀羅尼。當知亦有諸小陀羅尼也。」(『大正藏』
卷三十八、576a27-28)とあって「小陀羅尼」という語が使われている。また意味上からも「得小陀羅尼」が相応しい
ので、今、改める。

『法華經』に三陀羅尼を明かす^①。一には旋陀羅尼、二には百千萬億旋陀羅尼、三は法音方便陀羅尼なり。旋陀羅尼とは、旋轉の義なり。從假入空觀は能く旋轉す。假を觀じて空に入るは即ち轉じて界内外の諸の見愛を破し、空の真諦に入ることを得。若し但だ界内のみを破さば、即ち是れ通教の陀羅尼なり。一心に圓かに界内外を破するが故に即ち是れ圓教の陀羅尼なり。

百千萬億旋陀羅尼とは、即ち是れ從空入假して旋轉し、分別して界内の世諦、界外の世諦に入り、旋轉して塵沙と界内外の無知を破し、恒沙の佛法を顯わす。若し別して界外の無知を破さば、則ち別教の陀羅尼なり。今、一心に圓かに界内外の無知を破さば、即ち是れ圓教の陀羅尼なり。

法音方便陀羅尼とは、即ち是れ二觀を方便道と爲し、中道第一義諦に入ることを得。若し無明を斷じ、次第に中道に入るは猶お是れ別教の陀羅尼なり。無明を斷ぜず、一心に圓かに中道に入るは即ち圓教の陀羅尼なり。言う所の法音方便陀羅尼とは、此の陀羅尼を得ば、一切の言音を解するなり。亦た能く一音もて法を説き、衆生をして類に隨つて解を得さしむ^②。菩薩、此の三陀羅尼を得ば、即ち無礙陀羅尼に入り、一切陀羅尼を具足するなり。

問う。此の經は補處の陀羅尼を歎ず。何ぞ初心に約して釋することを得んや^③。

答う。發心は畢竟して二なれども別ならざるなり。而して後心に三諦に入り、無礙・横廣・細極・豎深・窮源ならば即ち是れ補處の無礙陀羅尼なり。

問う。三藏の菩薩に陀羅尼有るやいなや。

答う。尸毗王は歸命救護陀羅尼を得るが如し。當に知るべし。亦た諸の小陀羅尼有りと。輪王、亦た得。況んや菩薩をや^④。

問う。聲聞は小陀羅尼を得るやいなや。

答う。二乘は涅槃に入るに陀羅尼を須いざるなり。

觀心に陀羅尼を修するに約さば、三觀は類して作すに見易し。分別を煩わさず。辯才とは、即ち四辯なり。『大品經』は七辯を明かす^⑤。『大集經』は二十辯を明かし、『華嚴經』は四十辯を明かすなり^⑥。此れ三昧と陀羅尼の力用を歎ず。

須らく四教に約して辯の義を明かすべし。初めに三藏に約す。若し生滅の四諦の名字の法を分別して滯無ければ、即ち是れ法無礙辯なり。若し生滅の四諦の義を分別して滯無ければ、即ち義無礙辯なり。若し六道の言辭の不同に通達し、亦た能く其の語に同じて爲に生滅の四諦を説き、言辭に滯無ければ、即ち辭無礙辯なり。若し根の縁に稱いて生生不可説に於いて四悉檀を用いて機に赴いて説き、説くこと窮盡無ければ、即ち樂説無礙辯なり。辯は是れ辯了、才は是れ才能なり。蜜を以て薬を助け、之を服せば易し。才は文言を助け、化道行わるなり。通教は無生に約す。別教は無量に約す。圓教は無作に約す。類して解して見るべし。而して不斷と言うは、不盡なり。法辯・義辯は苦・集を緣じ、病を知ること不盡なり。法辯・義辯は、道・滅を緣じ、薬を識ること無盡なり。辭辯・樂説辯は病に隨て薬を授けること無盡なり。無盡は即ち不滅の義なり。

復た次に生滅辯より無生辯を起す。無生辯より無量辯を出す。無量辯より無作辯を出す。無作辯とは風の空中に於いて説法すること無障礙の如きが故に不斷と言うなり。三觀もて心に約して四辯を修すること、類して解して知るべし。¹²⁾

(1) 『法華經』に…を明かす 普賢菩薩勸發品に「爾時受持讀誦法華經者。得見我身甚大歡喜。轉復精進。以見我故。即得三昧及陀羅尼。名爲旋陀羅尼。百千萬億旋陀羅尼。法音方便陀羅尼。得如是等陀羅尼。」(『大正藏』卷九、61b5-9) とある。

(2) 一音もて…得さしむ 『維摩經』仏国品に「佛以一音演說法 衆生隨類各得解」(『大正藏』卷十四、538c2) とある。

(3) 補處の陀羅尼 『維摩經』には直接的にはこの語は見えない。智顛が維摩詰の階位を補處と見なして用いた表現か。經には方便品に「爾時毘耶離大城中有長者。名維摩詰。已曾供養無量諸佛深植善本。得無生忍。辯才無礙。遊戲神通速諸總持。」(『大正藏』卷十四、539a9-10) とあり、陀羅尼を得ていたという。この維摩詰について智顛は『維摩經玄疏』で「淨名者登補處智隣極境」(『大正藏』卷三十八、524b21) としつゝ。

(4) 初心 天台の修道の階位では五品、六根清淨位、十信の第一とする。

(5) 後心 同様に、十回向の第十、あるいは最後の刹那とする。

(6) 窮源 奥深い源、の意か。『文心雕龍』卷九、《總術》に「文場筆苑、有術有門。務先大體、鑒必窮源」とある。

(7) 尸毗王は：得るが如し 『大智度論』卷四に、「譬如尸毘王以身施鵠。釋迦牟尼 佛本身作王。名尸毘。是王得歸命救護陀羅尼。」『大正藏』卷二十五、87(29-882) ㄏㄨㄥ。

(8) 四辯 四無礙辯のこと。仏菩薩の説法における四種の無礙自在をいう。法無礙、義無礙、辭無礙、樂説無礙の四種。

(9) 『大品經』は：明かす 『摩訶般若波羅蜜經』卷八に「從諸佛所聽受法教。乃至薩婆若初不斷絶。未曾離三昧時。當得捷疾辯。利辯。不盡辯。不可斷辯。隨應辯。義辯一切世間最上辯」(『大正藏』卷八、276(13-16) とある。

(10) 『大集經』は：明かし 『大方等大集經』卷十五に「諸佛世尊知如是菩薩是大法器。令持正法。以佛神力及自善根力故。得捷辯。得疾辯。得無礙辯。得無滯辯。得巧説辯。得甚深辯。得衆音具足辯。得善莊嚴辯。得無減辯。得無畏辯。得妙偈讚辯。得快説修多羅辯。得善説譬喩本緣辯。得無壞勝辯。得分別句無盡辯。得圓足辯。得威德無違辯。得説法不唐捐辯。得斷衆疑辯。得利應辯。得分別文字不錯謬辯。得悅可衆辯。得問答方便辯。得以法降伏一切外道辯。已成就如是等二十四辯。」(『大正藏』卷十二、105(25-26) とあって、二十四辯を列挙する。また、同經の卷五にも「切法悉成其事。大德。菩提心者名無礙句。何以故。菩提心中攝諸義故。是名義無礙智。一切法界入菩提心。是名法無礙智。實無文字而説文字。是名辭無礙智。不可説法説不斷絶。是名樂説無礙智。義不可説名義無礙。一切諸法皆如幻相名法無礙。無言説業名辭無礙。於六入界無有障礙名樂説無礙。了達於義名義無礙。樂於寂靜名法無礙。字不合法法不合義名辭無礙。説即是聲名樂説無礙。如來正覺即菩提義名義無礙。菩提義者能生於法名法無礙。法可作句名辭無礙。説已得義名樂説無礙。法義者名義無礙。解脱者名法無礙。演説法相非有法性名辭無礙。分別法界及非法界名樂説無礙。僧即無爲名義無礙。諸僧一味名法無礙。和合僧故名辭無礙。説僧功德名樂説無礙。大德。是四無礙遍一切法。」(同前卷、32b17-c4) として

二十四を挙げる。守篤本純の用いたテキストは「大集二十四辯」として項目を立てており(巻一、三十五ウ) テキスト

によつて、二十、二十四の相違があつたようである。

- (11) 『華嚴經』は：明かすなり 『大方広仏華嚴經』卷二十六、十地品に四無礙をそれぞれ十通りに解釈して、計四十の無礙を列挙している。すなわち、「四無礙智言辭説法。是菩薩常隨四無礙智。而不可壞。何等爲四。一法無礙。二義無礙。三辭無礙。四樂説無礙。是菩薩以法無礙智。知諸法目相。以義無礙智。知差別法。以辭無礙智。知説諸法不可壞。以樂説無礙智。知説諸法次第不斷。復次以法無礙智。知諸法無體性。以義無礙智。知諸法生滅相。以辭無礙智。知諸法假名不斷假名説。以樂説無礙智。知隨假名不壞無邊説。復次以法無礙智。知現在諸法差別相。以義無礙智。知過去未來諸法差別相。以辭無礙智。知過去未來現在諸法説不可壞。以樂説無礙智。於一世。得無邊法明説。復次以法無礙智。知諸法差別。以義無礙智知諸法義差別。以辭無礙智。隨諸言音。而爲説法。以樂説無礙智。隨所樂解。而爲説法。（後略）」
- 『大正藏』卷九、568c15-569a3) のことである。

- (12) 風の空中に於いて 『法華經』如来神力品二十一で説かれる「如風於空中 一切無障礙」(『大正藏』卷九、52b23) を踏まえた表現。

【テキスト】 484b19-c7

布施持戒忍辱精進禪定智慧及方便力無不具足。

此二別歎智徳。還從定慧開七度。從定下開四。慧下開方便。故言別也。若作十波羅蜜對十地者。開禪出力願。開般若出方便及智也。若約四教分別不同者。但約四種四諦修布施乃至方便。即四教所明布施持戒乃至方便。四種不同也。而言無不 [484c] 具足者。波羅蜜義。波羅蜜義者此翻事究竟。亦翻到彼岸。布施具足。即是事究竟到彼岸也。乃至方便亦如是。故云無不具足。即是七波羅蜜也。

約三觀明七度者。若觀心因緣生滅即空即假即中。不見慳施。不見持犯。不見悲忍。不見進怠。不見定亂。不見

愚智。不見巧拙。畢竟無所有。而能善分別慳施。乃至巧拙冷然自曉。即是無不具足也。

【書き下し】

布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・及び方便力の具足せざること無し。

此れ二に別して智徳を歎ず^①。還た、定・慧より七度を開く^②。定の下より四を開く^③。慧の下に方便を開く。故に別と言うなり。若し十波羅蜜と作して十地に對すれば、禪を開きて力・願を出し^④、般若を開きて、方便及び智を出すなり^⑤。若し四教に約して不同を分別せば、但だ四種の四諦のみに約し、布施乃至方便を修むるは、即ち四教で明かす所の布施、持戒乃至方便は四種不同なり。而して、「具足せざる無し」と言うは波羅蜜の義なり。波羅蜜の義は、此に事實竟と翻じ、亦た到彼岸と翻ず。布施具足すれば即ち是れ事實竟、到彼岸なり。乃至、方便も亦た是くの如し。故に「具足せざる無し」と云う。即ち是れ七波羅蜜なり。

三觀に約して七度を明かさば、若し心に因縁生滅、即空即仮即中を觀ぜば、慳・施を見ず、持・犯を見ず、恚・忍を見ず、進・怠を見ず、定・亂を見ず、愚・智を見ず、巧・拙を見ず、畢竟して有する所無し。而して能善く慳・施、乃至巧・拙を分別し、冷然として自ら曉らむ。即ち是れ具足せざる無きなり。

(1) 此れ二に…を歎ず 断徳の次に第二に智徳を嘆ずるが、それに第一「総じて智徳を歎ず」、第二「別して智徳を歎ず」と、第三「位を歎ず」の三別があり、本段は第二の「別して智徳を歎ず」の段に相当する。本テキストの四八三頁下段七から八行目を参照。

(2) 定慧より…を開く 經文は六波羅蜜の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧に加えて、方便波羅蜜を追加して七度とする、の意。方便波羅蜜とは手立ての究極の意味で、十波羅蜜の第七に数える。

(3) 定の下より四を開く。六波羅蜜のうち、禪定から、布施・持戒・忍辱・精進の四波羅蜜を開出し、智慧波羅蜜を加えて六波羅蜜とする、の意。

(4) 禪を開き…出し。六波羅蜜の禪定から力と願の二波羅蜜を別出する、の意。

(5) 般若を…出すなり。前注と同様、般若波羅蜜から方便と智の二波羅蜜を別出する、の意。

【テキスト】 484c8-485a13

逮無所不起法忍。

此下三歎位釋成者。逮之言及。不起者不起界内界外煩惱生死。諸行休息無有動念。究竟寂滅。故名不起法忍也。即是大無生忍。亦名寂滅忍。而言無所得者。非是都無所得。無所得以爲得也。故大品經言。無所得以爲得。以此得無所得也。又仁王經明五忍。瓔珞經明四忍。兩經雖復不同。俱明寂滅忍。寂滅忍有上下。若金剛心名下忍。佛地名上忍。若開十地。別出等覺。亦得作三品。謂下中上也。今經歎德既隣果。復言逮者。當知逮於下忍。乃至中忍也。

若就四教各分別四忍者。三藏教本無此文。今約義作亦得分作四忍。初僧祇爲伏忍。二僧祇三僧祇爲順忍。百劫種相伏惑不起。爲無生忍。三十四心斷結。名寂滅忍也。

通教乾慧地名伏忍。性地名順忍。從須陀洹。若智若斷乃至九地。名無生忍。十地爲如佛名寂滅。

別教鐵輪十信名伏忍。三十心名順忍。初地至九地名無生忍。十地金剛[485a]心名寂滅忍也。

圓教五品弟子名伏忍。鐵輪十信六根清淨是順忍。初住乃至九地名無生忍。十地金剛心名寂滅忍。通論圓教。初心以上亦名伏忍。亦名順忍。亦名無生忍。亦名寂滅忍。故仁王云。從初發心至金剛頂。皆名伏忍。普賢賢首之義意在此也。

問。下文歎淨名德。但言得無生忍。當知不起法忍只是無生忍。今何用寂滅釋不起法忍耶。

答。在因讓果說無生忍。若通義無生。只是寂滅之異名。故大涅槃經云涅槃。此經云。法本不生。今則無滅。是寂滅義。若然者。寂滅忍即是無生忍。何所疑也。

若約觀行。一心三觀三諦惑不起者。即是修不起法忍也。故法華經云。著如來衣。如來衣者柔和忍辱心是也。

(1) 「是寂滅」の三字、テキスト原文になし。今、意味上から、また『略疏』との対照から補う。『略疏』には「故文云法本不生今則無滅。是寂滅義」(『大正藏』卷三十八、576c17)とあり、テキスト欄外注記には「義上疑脫是寂滅三字」とある。

【書き下し】

無所得の不起法忍を逮す。

此の下、三に位を歎じて釋成すとは、「逮」の言は「及ぶ」なり。「不起」とは界内外の煩惱生死を起さず。諸行休息して、動念有ること無し。究竟寂滅す。故に不起法忍と名づくるなり。即ち是れ大無生忍なり。亦た寂滅忍と名づく。而して無所得と言うは、是れ都て無所得なるには非ず。無所得を以て得と爲すなり。故に『大品經』に言わく、「無所得を以て得と爲す。此の得、得る所無きを以てなり」と。又『仁王經』に五忍を明かし、『瓔珞經』に四忍を明かす。兩經復た不同なりと雖も俱に寂滅忍を明かす。寂滅忍に上下有り。若し金剛心を下忍と名づれば、佛地を上忍と名づく。若し十地を開き、等覺を別出すれば、亦た三品に作ることを得。謂く、下中上なり。今經の徳を歎ずること、既に果に隣りす。復た「逮」と言うは、まさに知るべし、下忍乃至中忍に逮ぶことを。

若し四教に就いて、各、四忍を分別せば、三藏教は本より此の文無し。今、義に約して作さば、亦た分ちて四忍を作すことを得。初僧祇を伏忍と爲し、二僧祇・三僧祇を順忍と爲す。百劫に相を種え、惑を伏して、起らざるを無生忍と爲す。三十四心に結を斷ずるを寂滅忍と名づくるなり。

通教の乾慧地を伏忍と名づけ、性地を順忍と名づく。須陀洹の若しは智、若しは斷より乃至九地までを無生忍と名づけ、十地、佛の如しと爲すを寂滅と名づく。

別教の鐵輪十信を伏忍と名づけ、三十心を順忍と名づく。初地より九地に至るを無生忍と名づく。十地の金剛心を寂滅忍と名づくるなり。

圓教の五品弟子を伏忍と名づけ、鐵輪十信、六根清淨は是れ順忍なり。初住乃至九地を無生忍と名づく。十地の金剛心を寂滅忍と名づく。通じて論ぜば、圓教の初心以上を亦た伏忍と名づけ、亦た順忍と名づけ、亦た無生忍と名づけ、亦た寂滅忍と名づく。故に『仁王』に云く、「初發心より金剛頂に至るまで、皆な伏忍と名づく」と。普賢賢首の義、意は此こに在るなり。

問う。下の文に淨名の徳を歎じて、但だ無生忍を得と言ふ。當に知るべし。不起法忍は只だ是れ無生忍なり。今、何ぞ寂滅を用つて不起法忍を釋するや。

答う。因に在りて果を讓るを無生忍と説けり。若し通の義ならば無生は只だ是れ寂滅の異名なり。故に『大涅槃經』に涅槃と云う。此の經に云く、「法は本と不生なり。今は則ち無滅なり」と。是れ寂滅の義なり。若し然らば、寂滅忍は即ち是れ無生忍なり。何ぞ疑う所ならんや。

若し觀行に約さば、一心三觀して三諦の惑起らざるは、即ち是れ不起法忍を修するなり。故に『法華經』に云く、「如來の衣を著す。如來の衣とは柔和忍辱心、是れなり」と。

(1) 釋成 注釈用語。解釈を完成させる、これまでの解釈をまとめる、の意。たとえば『法華玄義』の一例を挙げれば、「佛經學脩因之相。論明得果之相。舉隨樂欲釋成世界悉檀也。隨便宜者。隨行人所宜之法。各各爲人者。是化主鑒機照其可否。(後略)」(『大正藏』卷三十三、687c15-8) のごとくある。

(2) 『大品經』に言わく『摩訶般若波羅蜜經』卷二十一、三慧品に「無所得即是得。以是得無所得。」(『大正藏』卷八、376c23-24) とある。

(3) 『仁王經』に「明かし『佛說仁王般若波羅蜜經』菩薩教化品に「佛言。大王。五忍是菩薩法。伏忍上中下。信忍上中下。順忍上中下。無生忍上中下。寂滅忍上下。名爲諸佛菩薩修般若波羅蜜」(『大正藏』卷八、286b22-25) とある。

(4) 『瓔珞經』に「明かす 竺佛念訳『菩薩瓔珞本業經』卷下、積義品に「佛子。以正無相善入衆生空。現萬世界六通變化空同無爲故。名離垢地。佛子。光慧信忍。修習古佛道。所謂十二部經。修多羅。祇夜。毘伽羅那。伽陀。憂一陀那。尼陀那。阿波陀那。伊帝目多伽。闍陀伽。毘佛略。阿浮陀達摩。憂波提舍。以此法度衆生。光光變通故名明地。佛子。大順無生起忍。觀一切法二諦相。上觀佛功德。下觀六道衆生。大慈觀故說法授樂。大悲觀救三苦衆生。大喜觀喜前人受樂。大捨觀一切衆生。皆人平等入七觀法。故名焰地。佛子。順忍修道。三界無明疑見。一切無不皆空。八辯功德入五明論。所謂四辯因果内道外道辯。五論者内外方道因果鬼師無不通達。故名難勝地。佛子。上順諸法。觀過去一切法一合相。現在一切法一合相。未來一切法一合相。法界因緣寂滅無二。故名現前地佛子。無生忍諸法。觀非有煩惱非無煩惱。一生一滅一果。三界最後一身一入一出。集無量功德。常向上地念念寂滅。故名遠行地。佛子。是故菩薩無生觀。捨三界報變易果。用入中忍無相慧。出有入無化現無常。自見己身當果。諸佛摩頂說法。身心別行不可思議。故名不動地。佛子。復入上觀光光佛化無生忍道。現一切佛身。故名妙慧地佛子。菩薩爾時入中道第一義諦。大寂忍下品中行。行佛行處。坐千寶相蓮華。受佛記位學佛化功。二習伏斷大信成就。同實際等法界。二諦一相。具一切功德入衆生根。無量瓔珞功德。一時等現一切形相。故名法雲地」(『大正藏』卷二十四、1017c28-1018a28) とあり、信忍、順忍、無生忍、寂滅忍の四忍

が説かれている。

- (5) 果に隣りす 修道の位として、仏果の隣に位置すること。等覺の位。
- (6) 初僧祇 菩薩が成道するのに必要な修行期間である三阿僧祇劫と百劫のうちの、最初の阿僧祇劫のことをいう。
- (7) 三十四心に結を断ずる 三十四心とは、八忍八智の十六心と、九無間道、九解脱道の十八心とをいう。修行者は凡夫位から見道に入つて八忍八智の十六心を起こし、この十六心で八十八使の見惑を断ずる。次に修道において修惑を断ずるが、九品の修惑を無間道と解脱道との二心で断ずるので九無間道、九解脱道が必要である。見惑、修惑の煩惱を合計三十四心で断ずるので三十四心断結成道という。
- (8) 鐵輪十信 金輪、銀輪、銅輪、鉄輪の四種の転輪聖王を菩薩の階位に当てはめた表現で、金輪王は十回向、銀輪王は十行、銅輪王は十住、鉄輪王は十信とする。『仁王般若波羅蜜經』卷上に、「中下品善粟散王 上品十善鐵輪王 習種銅輪二天下 銀輪三天心性 道種堅德轉輪王 七寶金光四天下 伏忍聖胎三十人 十信十止十堅心 三世諸佛於中行 無不由此伏忍生」(『大正藏』卷八、827b15-19)とある。
- (9) 三十心 修道の階位で、地前の十住、十行、十回向の三十の位を総称する語。
- (10) 普賢賢首 狐山智圓の『維摩經略疏垂裕記』卷二に、「普賢賢守者。賢即伏忍之異名。以凡位名賢。故既等覺名賢。」(『大正藏』卷三十八、733a19-20)とあって、「賢首」を人名でなく、「賢」を伏忍とし、その第一の意に取っている。
- (11) 因に在りて果を讓る 維摩詰が仏果を取らずに、在家居士の姿を取っていること。
- (12) 此の經に云く『維摩經』入不二法門品に「法本不生今則無滅」(『大正藏』卷十四、500c23)とある。
- (13) 『法華經』に云く『法華經』法師品に「是善男子善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃應爲四衆廣說斯經。如來室者。一切衆生中大慈悲心是。如來衣者。柔和忍辱心是。如來座者。一切法空是。」(『大正藏』卷九、31c24-27)とある。

Summary

An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 (8)

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538-597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561-632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that the work had been dictated by himself. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711-782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. In the above circumstances, at the present, although Zhanran's concise commentary is put in *Taishō shinshū daizōkyō* 『大正新脩大藏經』, Zhiyi's is not in spite of its value.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shunei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549-623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經 in its form. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This instalment contains merely a few paragraphs, i.e. from X.18.482b1 to X.18.485a13. I intend to continue publication of the annotated translation in the future issues.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*